

## 戦争は二度と繰返すな

福岡市城南区 積 新悟

先の大戦が終わってから50年を数え、本年（平成7年）は、改めて戦争の苦しかった悲惨さを顧み、平和の尊さを再認識する意義深い大きな節目の年に当たります。

一方、戦争を知らない戦後世代が県民の6割以上を占めるなど驚きです。戦争の体験は次第に風化し、忘れ去られようとしています。戦後50周年の節目の年を記念し、風化しつつある戦争体験を後世に伝えたいと思います。

また、今年は私が乗っていた軍艦「羽黒」がマラッカ海峡に没し、数多く戦友を戦死させて、満50年を迎えます。5月15、16日には「軍艦羽黒没後50周慰霊祭」を佐世保東山墓地公園内の斎場で執り行う予定です。当時21歳の私も70歳の坂を越え、会員の平均年齢はこれより遙かに高くなりました。

門司鉄道局に勤務していた私は、昭和17年9月に佐世保相浦海兵団に入団した。当時軍人は甲種合格が普通と思われていましたが、私は「第二乙」という余り健康でない体で軍隊に合格させられた。男性は、どんどん軍隊に徴兵させられ、毎日、毎日軍隊入隊の送別会が開かれて、勤務する人が段々と少なくなっていく。列車は軍人の輸送と、軍の荷物が次ぎ次ぎと通り戦争一色の街となった。ラジオは軍艦マーチを流し、大本営発表として毎日、数十回と戦果を発表し、当時は日本は戦果に酔った良い時期だった。新兵教育後、横須賀海軍砲術学校普通科に入学、卒業と同時に軍艦「羽黒」の乗艦を命ぜられた。私は乗艦のため艦の後を追ってラバウルに上陸したが、一日違いで「羽黒」は出港した後だった。当時ラバウルは毎日敵の空襲が激しく、また日本空軍も何十機と空中戦で敵を撃墜する、最前線の激戦地だった。内地行きの潜水母艦でやっと佐世保のドックに入港していた軍艦「羽黒」に乗艦ができた。そのとき私は上等水兵だった。私の体験はこの「羽黒」一艦だけである。今いつも思い出すのは「羽黒」の最後の姿と、共に戦ってきた戦友の顔である。

昭和19年10月25日のレイテ沖海戦のとき、配置は左舷4番高角砲一番砲手だった。昨日は、6時間延べ600機との対空戦をした軍艦「武蔵」を失った。早朝「大和」からの『全軍突撃せよ』との信号があがり、「利根」と共に突撃！！。敵空母に「羽黒」の主砲が命中、空母は火炎を吹き右にかたむき始めた。もう敵空母はすぐそこだ、はっきり見える！！海面にブイをつけた敵兵が蜘蛛の子を散した様に泳いでいる。敵機のひっきりなしの空襲で、戦死者と負傷者が多く出た。甲板は血と薬莖ですべる。突然頭上の機銃が、泳いでいる敵兵に射撃を始めた。味方の「敵討ち」！！。すぐ艦橋より「射つな」の指令が来る。味方がこんなにやられているのと思う。敵機は入れかわりたちかわり来襲する。敵の操縦士の顔が大きく近づき銃撃！！。バチバチとわが高角砲に火花が散る。我々が少年の頃、敵は弱虫で勇気が無いような教育を受けてきたが、とてもとてと。艦に向かって突進してくる米国飛行士の顔が大きく見

えるまで、機銃を打ちながら急降下してくる。敵もそれほど勇敢であったが、「羽黒」の全甲板に火の玉が縦横に飛び散る。そのとき、敵機の機銃掃射の弾丸が、後部に積んであった高角砲弾薬包に命中した。白い線のようなものを吹き上げた。私は無我夢中で飛び降り海水をかけた。もしもこれが誘爆していたら大変なことになっていた。私の戦闘服はどこからともなく出血し、白い服が赤く染まっている。機銃掃射はいよいよ激しく、不幸にして右手甲が焼火箸で焼かれる様な痛みを感じたとき、手袋をはめていた右手甲がパッと大きくえぐられ血が吹き出した。大声で「高角砲の装填が出来ない」と言う！！。同時に右足指先左に敵弾が靴の上から底まで貫通した。ついに動けなくなった。内山砲員長に報告、やっと前甲板の医務室に行く。医務室に行ったらいよいよ歩けなくなった。しばらくして2番砲塔、後部の医務室に爆弾が命中したと聞く。早朝より夜暗くなるまで戦いは続いたが、何もしないで医務室に寝ていると、戦いがこれ程恐く、そして長く感じたことはなかった。私は同戦隊の「妙高」に移され、シンガポールの101海軍病院に入院した。入院をして、レイテの戦果発表を大本営発表で久しぶりに聞いたが、戦果とあまりに違っていたので以後、大本営発表は信じなくなった。

昭和20年3月私は全快し、内地送還されるようになったが、帰らずもう一度「羽黒」に乗艦し戦いたい、とお願いして再乗艦を許してもらった。今回の配置は左高角砲測距の巡回手となった。5月7日「羽黒」は「神風」とともに輸送命令を受け、輸送貨物を満積してアングマンに向けケッペル港を出撃した。16日朝2時5分「配置につけ」のブザーが鳴った。私は測距筒に飛び込んだ。敵艦隊との遭遇だ！！。左30度と指示される方向に旋回、眼鏡に4、5隻の敵艦がハッキリと見える。一番艦に照準をあわせると、もう敵は砲弾を開始している。パッパッと敵艦は砲撃している。「羽黒」の主砲の2斉射目が敵の一番艦に見事に命中した。次の照準に旋回しようと思ったとき、突然「羽黒」前部二番砲塔下に魚雷が命中した。大きく艦がもち上がりゆれる。大きな水柱があがり、火災が起きた。艦は急に左に傾斜する、司令室が急に明るくなり砲弾で吹飛ぶ。傾斜が激しくなり電源もとまる。もう測距の巡回も出来なくなった。左舷のカッター甲板が海水に洗われている。突然駆逐艦が全速で左舷を横切る。「神風だ撃つな」の指令がある。「羽黒」の敵の照明弾で昼間のように明るい。動けなくなった艦の廻りを右舷より敵駆逐艦が砲火を浴びせて突入して来る。あつと言うまに3発目の魚雷が艦に命中し、その瞬間艦もろとも海中に巻き込まれた。足に多くの人がからむ、そして引っ張る、ギリギリまで息を我慢した……がどうしても我慢が出来ない。3回程海水を飲んだ、だがどうしても海面に浮上しない、自分はこれで終わりだと観念した。急に今までの苦しみが消え楽になった。母と姉の顔が浮かぶ。楽しかった内地での思い出が走馬燈のように次ぎ次ぎと浮かぶ。それは長い時間のように感ぜられた。

死とはこのようなものかと思った。サヨナラと思わず言った。突然海面に浮上したのだ。眼の前に「羽黒」は艦首を海中に没し、艦尾だけ残している。突然艦尾が沈没した。ものすごい渦が起った、その渦に巻き込まれ、マリのように足と頭が上下にクルクルと廻る。あまりの苦しさに初めて「助けて！！」と大声で叫んだ。しばらくして今までのことは嘘のように海は静

かになった。夜になって「神風」駆逐艦に私達は救助され、この戦いで神風27名戦死し、羽黒は1055名のうち751名戦死した。私達生存者304名はペナンに救助された。このような海で長時間泳ぎ、奇跡的によく助かったものだ、と今更ながら不思議な運命を思った。国のため殉じた人に対し感謝慰霊の誠を捧げることは国民の当然の義務であり、戦死された尊い命があつてこそ、今日の平和の日本、経済発展の基礎があることを一日たりとも忘れてはならないと心に誓っている。

21世紀を継承する若人よ、国のため国民のため殉じていった数多くの犠牲の上に、新しい日本があることを決して忘れないでほしい。不幸な戦争は二度と繰り返してはならない。